

二月のテーマ 本(もと)を忘れず

元点にかえれ!

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋(一九二一・一九九九)のこゝとばを掲載します。



え・古屋智子

い つも奇抜な方法ばかりを考えたり、派手なやりかたにうつつをぬかしたりでは、ほんとうの力を身につけることにはならない。またいつもその日だけのこと、その時だけのことなどを断片的にやるだけでも、実力にはならない。

地味であろうと、古めかしくあらうと、はじめを思い、もとかかえてやるのが、真の力をつける。これを元点にかえるという。ふつうには原点と書いているよ

うだ。原はみなもとという意味だ。岩(厂:がんだれ)の下に泉が湧いている意味だ。元とは、兀:こつ(首、頭)から来ており、はじめの意味である。どちらを書いて

もよいが、はじめとか、もともととかいう意味を強調するならば、元点とかくほうが適切であろう。

よく創立〇周年というような行事がおこなわれる。質素に、また盛大にそれぞれの向きによっておこなわれるようだが、いずれにせよ創立当時のはじめにかえり、そ

の時のことを思いだし、どんな気もちでやったのか、目的は何だったか、またその時の苦労は、そして喜びは:などをあらためて自覚する。これが元点にかえるということだ。

事業でも何でも、時代がすすむにつれて、かえてゆかねばならぬことは、たくさんある。旧態依然としていては、とりのこされてしまふ。新しいことは、どしどし取り入れられるべきだ。だが、創業の精神が忘れられてしまうと、新しく発展しているようでも、ほんとうの力がでなくなつて衰退してしまふか、または、まったく別のものとなり変わる。

元点にかえり、また新たなスタートを切る。このくりかえしでやっていると、そのつど内容に重みが増加する。宙に浮かかかっていた足も地につく。ゆがみかかっていた姿勢も、まっすくになる。おごらず、高ぶらず、堂々と仕ごとにとり組むこともできる。創立五年、十年、二十年、三十年:と、

いよいよ箔がついてくるのである。国家でも同様だ。建国一周年もよい。しかし年をふるごとに、その建国の精神を失わずに、そのつど元点にかえつて前進してゆくと、五十年、百年、五百年、千々と、その厚味を加え、深味を増しつつ、いやが上にもその光彩をか

がやかせる。それは国の面積の大小、人口の多少などにかかわりなく、重厚味のある独特の魅力となつてますます他国の尊敬をうけるようになる。個人でも同様だ。自分自身に何か記念になるようなことが起こつたとき、それをチャンスに元点にかえるようにする。誕生日などはそのひとつであろう。この生命が両親を通じてこの地上にあらわれた日。その時の記憶はもろろん、さだかではないとしても、自分の生命をこのようにはぐくんできた親に、祖先に、そして世話になつた人々に感謝の意をあらわす。生命のもとに感謝するとは、つまり元点にかえることだ。

(月刊『新世』一九七六年十一月号より)